黒海海上の戦闘

アラハバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒海海上の戦闘

【Ｎコード】
Ｎ０１１２Ｙ

【作者名】
アラハバキ

【あらすじ】
アフリカでの反政府軍との戦闘はロシア空軍の裏切り、トリニティの使用により目的が変わりロシアの半分を抑えるクーデター軍の撃破ガ目的となった
黒海海上に布陣する敵艦隊をたたくためウォーウルフ隊は意外な戦闘機で出撃することになった

（前書き）

空戦をどう書けばわからないので文章がよくわからないことになってます。あの機体が出る理由を無理やりつけてみました

私たちは今、黒海海上を飛行している。目標は黒海海上に遊弋するクーデター軍が指揮する海上部隊、と拉致されたロシア首相の身柄を奪還することだ。私たちは急遽同盟国日本が三年前より対外輸出を始めた対艦攻撃向きのＦ－２マルチロール戦闘機に乗り換え敵艦隊攻撃に向かった。装備は日本製対空ミサイルＡＡＭ－４を２発と同じく日本製の対艦ミサイルＡＳＭ－２を４発、それにＧＰＳ誘導のＪＤＡＭが４発だ。今回は増槽が無い為艦隊攻撃を終えたら即座に基地へ帰還しなければならない。その為ミスは許されない

何故私たちウォーウルフ隊が日本製のこの機体に乗っていて日本製のミサイルを搭載してるかというと、敵艦隊攻撃にあたり有力な航空兵力が今合衆国に存在しない為に起きた出来事である。米空軍の対地対艦攻撃専門の部隊は前回アフリカで使われたトリニティにより壊滅、アフリカ沖で支援攻撃に当たっていた海軍の空母部隊は長く作戦行動を取っていたため艦体の修理をするらしく本土に向け帰還中で、代わりの艦隊は未だにインド洋の東端に着いたばかりだった。その代わりの攻撃機として浮上したのが三年前に輸出を開始した日本製のＦ－２だった。合衆国空軍にも既に一個飛行隊配備されていたためそれを送ろうかと考えたらしいのだが時が悪く修理中の機体が多く戦闘任務につけない状態だったらしい

そこでペンタゴンは私たちが空軍の保有する戦闘機全ての操縦免許を持ってることに気付いたらしく、「ならば日本の保有するＦ－２をわが国で購入し、彼らを乗せよう」と考えたらしい。そして急遽日米首脳会談が電話越しで行われそういうことならと日本の首相が合意し、今に至るということらしい

ちなみにこの電話会談と今日の間は一週間と開いていない。ゆえに塗装は日本風のままでライジングサンまでついている

「ウォーウルフリーダーよりマジック、敵艦隊までどれほどだ？」
「マジックよりウォーウルフ。およそ１７０マイル（約２７３？）、まもなく敵艦隊の防空圏内に捉えられるものと思われる。高度を１０００フィート（約３０４ｍ）以下に下げて攻撃態勢に入られたし」
「ウォーウルフリーダー、ラジャー。これよりモーラト隊と交信する。…ウォーウルフよりモーラト隊どうぞ」
我々の左方を飛行しているのがモーラト隊。機体はＳｕ－２４ＭＰ、電子戦も可能な戦闘機だ

「ラジャー。また一緒に飛べて光栄だウォーウルフ。」
「こちらこそモーラト。長距離レーダーに多数の機影が認められる。今回こちらは基本的に対空戦闘を想定した装備ではない。モーラト隊に任せたい」
「了解だウォーウルフ。そちらは艦隊に集中して空の敵は我々に任せてくれ」
「了解したモーラト」
私は短い交信を終え思考を切り替える

「ウォーウルフ１、攻撃開始地点に接近。敵艦隊までの距離、およそ１１０マイル（約１７７？）。７０マイル（約１１２？）より攻撃を開始せよ」
「ウォーウルフラジャー。１より全機、高度５００フィートまで降下せよ。超低空侵攻で敵艦隊を攻撃する」
超低空侵攻は今も昔も変わらない対艦攻撃で最も安全な方法だ。それに対艦ミサイルである程度敵艦隊にダメージを与えてからではないと無誘導爆弾での爆撃なんて出来るわけが無い
そう考えているうちにモーラト隊が動き出した

「こちらモーラト1、これよりＥＣＭを開始する」
「ラジャー。ウォーウルフ隊攻撃用意」
「マジックよりウォーウルフリーダー。距離７０マイルを切った。全機交戦を許可する」
そして交戦許可が出た
「ラジャー。ウォーウルフ１フォックス１！フォックス１！」
私が対艦ミサイルを２発発射し、ウォーウルフ各機もそれぞれ２発ずつ対艦ミサイルを発射した
「全機距離を詰める。５０マイル（約８０？）までアフターバーナーを使用し接近。第２波を送り込む」
「ウォーウルフ２ラジャー。ぶち込んでやりましょう！」
ガッツのいつもと変わらぬ陽気な声を聞きながらアフターバーナーを焚き敵艦隊との距離を詰める。実は私がこの機体に乗るのは両手で数えられるほどしかない。そのうち二回はここ数日である

「マジックよりウォーウルフ。まもなく敵艦隊より５０マイルの地点に到達する。攻撃を開始せよ」
「ラジャー。ウォーウルフ１、フォックス１！フォックス１！」
第２波の対艦ミサイルが放たれた。ウォーウルフ隊８機が２波に分けて放った合計
３２発の対艦ミサイルは２０分ほどの時間を空けて敵艦隊に時速８００ｋｍ、高度１０ｍ程
度で迫っていく。これほどの低空で対艦ミサイルが忍び寄っていくと合衆国の誇
るイージス艦隊でも迎撃には手間取るだろう。しかも敵艦隊に防空艦は１隻しか

おらずそれ以外の艦は未だロシアがソ連と呼ばれていたころに整備されたミサイ
ル飽和攻撃のために建造された対艦攻撃に特化したフリゲート、駆逐艦しかいないとわかっている
恐らく主目標の防空艦と空母は撃沈ないし撃破は確実に出来るだろう

「ウォーウルフ隊、突撃するぞ」
「ウォーウルフ2ラジャー。血が滾ります！」
「油断するなよガッツ。全機爆撃態勢をとれ」
そうしているうちにマジックからの報告が入った
「こちらマジック、第一波が到達した模様。１６発の内６発が迎撃され、残りの１０発が命中した模様。敵艦隊内で最も大きい反応が消えたため空母は撃沈できたようです」
「それがわかっただけでもありがたい。第二波で防空艦も潰せればいいが…」
防空艦に爆撃をするのは自殺行為でしかないからな

「第二波到達まで残り一分」
私たちはその報告を聞き緊張感を高めていく。第二波到達とともに高度を上げ最大速力で敵艦隊に突撃するからだ。もし第二波で防空艦を潰せていなければ開戦以来撃墜者のいないウォーウルフ隊で戦死者が出るかもしれないからだ
「残り３０秒」

「１０、９、８、７、６、５、４、…」
そこまで聞いたとき私は命令を下していた
「高度５０００フィートまで一気に上昇する。ついて来い」
私は残り少ない燃料を気にしながらアフターバーナーを使い一気に

５０００フィートまで上昇し爆撃工程に入った。敵艦隊との距離は２０マイルにまで接近していた。恐れていた防空艦からのミサイルは…こない！
「よし目標通りやったか！全機爆撃開始！爆撃終了後急速離脱するぞ！」
私は二隻の駆逐艦に標的を定め、それぞれに二発ＪＤＡＭを投下した。僚機も全機投弾を終えたようだ。それを確認した私は旋回し基地に機首を向けた

そして二分後マジックから戦果報告が届いた
「マジックよりウォーウルフ。先ほどの爆撃で１０隻が撃沈、３隻が大破、６隻が中破だ。対艦ミサイルでの攻撃による結果とあわせれば敵艦隊はその戦力を６割喪失。主力であるアドミラル・グズネツォフ級空母１隻とキーロフ級ミサイル巡洋艦１隻を撃沈し、その他駆逐艦６、フリゲート８、コルベットを１５隻撃沈した。作戦成功だ、ウォーウルフ、モーラト」
「ふぅ…なかなか無茶な作戦だったが上手く言ってよかったよウォーウルフ。まぁ我々は念のためのＥＣＭしかやってないが」
「いや、それがなければ我々は帰還できたか怪しいだろう。感謝するモーラト」
「嬉しい事を言ってくれる。帰ったら両隊で酒でも飲もう、こちらの奢りだ」
「感謝する。よかったなガッツ、帰ったら宴会だ」
「モーラト１へ、感謝するぜ。ひゃっほ～う！」

（後書き）

アメリカ空軍の部隊がＦ－２に乗る理由ってこんなんしか考えられないと思うんですよ

まぁこれは欧州機やロシア機にも言えますがｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0112y/

黒海海上の戦闘

2011年10月29日04時18分発行